

回想される〈風景〉

——永井荷風「問はずがたり」を読む

一 「不潔なまでの低俗」——同時代評と研究史

永井荷風「問はずがたり」〔展望〕一九四六・七^①は発表直後から不評にさらされた作品である。その理由はこの作品の語り手（書き手）である「僕」の女性関係があまりにも不健全だからである。物語内容を女性関係に絞ってまとめれば学生時代の「僕」は最初は隣に住む満枝と関係を結び、次に彼女の妹辰子と関係を結ぶ。フランスからの帰国後「僕」はやがて辰子と再会して結婚するが、辰子の死後は女中の松子と、さらには義理の娘雪江とも関係を結んでいく。また松子と雪江の「女同士の戯れ」を「僕」が覗く場面も描かれており、作中の人間関係は混迷を極めている。

このような節操のない物語に対して同時代評も困惑を隠せない。日夏耿之介「輓近の荷風文学」〔群像〕一九四六・一一^②は「つゆのあとさき」〔中央公論〕一九三一・一〇から「浮沈」〔中央公論〕一九四六・一〇までを射程に入れながら戦後

嶋田直哉

の荷風文学の動向を簡潔にまとめている。その中で日夏は「浮沈」について「荷風本来のリリシズムを喪失してゐぬ」ことと、女主人公の性格描写に大きな関心を寄せる。しかし一方で「問はずがたり」については登場人物について「愕くばかりの道義的反省の皆無な男女」と裁断し、さらには「この白茶けた虚無時代の頹唐家、此老作者の虚無感情をよく示してゐる」と半ば荷風への批判とも取れる評言を残している。このことは中山義秀「問はずがたり」〔人間〕一九四六・一〇も同様で「往年の情熱や感興は力弱いものとなつてきたやうに思はれる。先生は老いられたのであらうか。」と作家的な衰えを指摘している。後年第一次『荷風全集』全二八巻（岩波書店 一九六二・一二―一九六五・八）の編集校訂に尽力する稲垣達郎「永井荷風——幸福のうた——」〔芸術Ⅱ〕一九四六・一一もまた主人公の人物造形について「人間侮蔑の上に立つ生き方の低劣さ」を指摘し、さらに「作者の居場所が不潔なまでの低俗なところに落ちてしまっている」と荷風本人の人間性にまで批判の矛先を向けているのはいささか異常な事態と言えないだろうか。

確かに佐藤春夫「永井荷風——その境涯と芸術——」(「展望」

一九四六・一〇(一)^③)のように荷風は「むかしから世相の変遷には興味を抱く作家」であり、特に「問はずがたり」は「この種の作品中の傑出したもので、その淡々とのびのびとした筆致」で描かれ、「詩美を傷つけないエロティシズムなど渾然として悠揚迫らざる風格の好ましいものでこれこそ春水とモウパッサンとの混和の黄金律を示した堂々たる雄編」であると断言してしまう人物もいる。しかしそれは永井荷風と佐藤春夫が師弟関係であったからで、先述した同時代評と比較する限り、佐藤春夫の絶賛はいささかけ離れた位置を占めていると言わざるをえない。

このような「問はずがたり」の不評は同時代評ばかりでない。研究史にも色濃く及んでいる。戦後いち早く永井荷風の文学像の全体をまとめた吉田精一「永井荷風」(八雲書店 一九四七・一二)は「問はずがたり」の物語内容について「在来の彼のどの小説よりも淫蕩で、放縦である」(二一九頁)とし、さらに臼井吉見「問はずがたり」贅言(『荷風全集第十七巻』月報第十七号 中央公論社 一九五一・四)もまた物語内容について「これ以上のことはありやうがないほどの乱倫淫蕩は、この作者といへども、描いたことはなかった。」と言及している。このようなトーンが以後「問はずがたり」について語る上にも大きな前提となっていることは間違いない。

それゆえに「問はずがたり」研究史はこのいささか据わりの悪い「乱倫淫蕩」な作品を物語内容ばかりではなく、全く違う角度から捉え生産的に荷風文学の中に位置づけようとしてきた。例えば赤瀬雅子「問はずがたり」試論——ピエール・ロティの影響」

(「比較文学年誌」四号 一九六七・七)^④は「問はずがたり」に

おける自然描写に言及しながら、比較文学的な視点からピエール・ロティと荷風の内面的世界の一致を指摘している。また笹淵友一は荷風の作品全体を見渡しながら主に「澤東綺譚」(『東京朝日新聞』一九三七・四・一六(六・一五))との関連を中心に「問はずがたり」を荷風文学の中に位置づけようとしている。さらに森安理文「問はずがたり——夢の夢について」はさらに視野を日本文学全体に広げ、「問はずがたり」が「『かたりもの』として古くから存在したわが国の文芸様式の伝統を踏まえた作品」であると位置づける。近年では菅野昭正が「同時代の社会(中略)」を正面の視野に配置している^⑤とし、さらに主人公の「僕」を「時代に追隨しない画家であり、権力に抗する市民」であると捉え、「問はずがたり」に荷風その人の抵抗の姿を見出そうとしている。しかしこのような生産的な見解が提示される一方で、やはり根強いのが若菜薫「性の地獄絵図——「問はずがたり」論」^⑥のよう^⑦に「何という強烈な背徳の芳香を放つ家庭小説なのであるうか。」といった読解である。ここでは同時代評における日夏耿之介の「楞くばかりの道義的反省の皆無な男女」といった主張と何ら変わらな^⑧いことが繰り返されていると言つてよい。つまり「問はずがたり」は現在においてもやはり「乱倫淫蕩」な作品として根強く位置づけられていることが理解できるのだ。

しかし本論では「問はずがたり」についてこれまで繰り返されてきた「乱倫淫蕩」な作品として考えるのではなく、この作品の章立て「上の巻」「下の巻」のそれぞれの物語構造に注目したい。その理由は「問はずがたり」が荷風の作品中唯一戦中と戦後をま

たいで執筆された小説作品であり、その連続性の中で荷風が小説という形式を探りながら戦後から戦中をどのように描いていったのかを考えることができるからである。具体的に言えば作品の巻末に記されているように「上巻 昭和十九年十二月脱稿」、「下巻 昭和二十年十一月脱稿^①」というように戦中と戦後というように明らかに執筆期間が異なり、さらに「下の巻」では「八、以下章番号を示す」以降、作品の舞台に岡山が登場するなど荷風の疎開体験が色濃く映し出されている。自身の戦中や疎開体験を戦後という時空間から小説というジャンルでどのように回想するのか、という実験の可能性を物語構造に注目することで明確にし、これらの作業を通じて戦後の荷風の出発点を確認したいと思う。

二 語りの遠近法——「上の巻」の物語構造

はじめに「問はずがたり」の成立過程を簡単に確認しておく^②。「問はずがたり」ははじめ「夢の夢」という題名で起稿され、次いで改題して「ひとりごと」、さらに改題を経て「問はずがたり」となった経緯がある。「断腸亭日乗」によれば「問はずがたり」の原型となる作品が執筆開始されるのは一九四四年四月二二日のこと。以後断続的に執筆され、同年一〇月一四日には「小説夢の夢」という題名がみえる。さらに同月二六日には「小説夢のゆめ初稿成る。改題して「ひとりごと」となす。」となり初稿段階で完成をみる。同月三〇日には「午後小説ひとりごと続篇起稿」、「十一月一〇日「食後ひとりごと続篇の稿を脱す。」とあり「続篇」が完成し、同月一三日「小説ひとりごと正統とも校訂浄

写。」によって第一稿が完成する。現在われわれが読む「問はずがたり」の「上の巻」全九章、「続篇」である「下の巻」(一)～(七)がそれにあたる。

その後、荷風は岡山へ疎開しそこで終戦を迎え、戦後は東京へ戻って熱海に留まっている間、さらなる続篇の執筆に取りかかる。一九四五年一月一日「晩食の後ひとりごと続稿執筆深更に至る」、「同月一三日「旧稿続ひとりごと後半改竄」とあり、「下の巻」(八)～(一二)の執筆が中心に行われたことがわかる。なぜこの箇所が執筆されたのかが判明するかといえば、「下の巻」(八)以降、語り手(書き手)の「僕」が岡山県総社に隠棲してしまうからである。実際に岡山に疎開した実作者荷風の体験がなければこの箇所は執筆できないと考えられるからだ。

一九四六年四月一日「燈刻中村光夫氏来り拙稿ひとりごと^マ六月の雑誌展望に掲載したしと言ふ、(中略)褥中ひとりごと^マ閲読、改題して問はずがたりとなす」とあり、中村光夫の来訪によって雑誌「展望」への掲載と、題名が「問はずがたり」に確定する。以上がおおよそその成立過程である^③。

このような成立過程と「問はずがたり」の物語構造は緊密な関係にある。先述したように「問はずがたり」は「上の巻」全九章、「下の巻」全一章から構成されている。ともに画家である太田の「僕」による一人称回想体の形式である。これらすべての物語言説が一気に後置的な時点から回想されるのではなく、以下に示すように【A】～【C】の三つの部分に分割され、それぞれの時点でその回想が接続され全体として一つの物語内容を構成している。

【A】「上の巻」(一)～(九)

↓一九四四年八月時点からの回想

【B】「下の巻」(一)～(七)

↓一九四四年一二月時点からの回想

【C】「下の巻」(八)～(一一)

↓一九四五年一〇月以降の時点からの回想

先述した成立過程とこの構成はびたりと合致する。【A】は一九四四年一〇月二六日初稿成立時、【B】は同年一月一〇日「続篇」脱稿時、【C】は戦後熱海で執筆した一九四五年一月半ば頃の「ひとりごと続稿執筆」時である。

まずは【A】の物語構造から検証していこう。【A】で語られるのは「僕」が美術学校の学生であった頃、友人三人と小石川牛天神の裏に一緒に住んでいた頃の話から、隣の家に住む満枝と出会い、さらに「僕」がフランスから帰国して満枝の妹辰子と結婚し、彼女の娘である雪子と家庭生活を営む。そして辰子の死後は女中の松子と義理の娘である雪江と「僕」の三人暮らしの様子が描かれている。【A】の最後の時制は後述するように一九四四年八月頃が想定できる。また「僕」が小石川牛天神裏を懐かしみながら「僕がその日(二十四年のむかしだ)みんな遊びに出て行った後、」(上七、以下「上の巻」第七章を示す)と回想していることから、【A】は一九二〇年から一九四四年までの二四年間の時間的持続を想定することができる¹⁵⁾。

この「僕」による一人称回想体の特色は以下の冒頭部分からう

かがい知ることができる。

まだ九月にはならないけれど、一雨ごとに今年の秋は驚くばかり早くふけて行く。蟋蟀は昼間から家の中でも鳴音を立てるやうになった。さう言つたら、いかに人気のない家だといふことが察せられるであらう。去年夏のはじめに幾年間同棲してゐた辰子がなくなつてから、家には雪江といふ娘と松子といふ女中があるばかり。一人は外からまだ帰つて来ず、一人は今しがた洗湯へ行つた。(略)昨夜からふと思いついたま、僕は二十年近く一緒に暮らした辰子と、雪江といふその娘の事とを手帳に書き留めてゐる。人に読ませるつもりではない。ただ老の寢覚の無聊を慰めるために過ぎない。

(上一)

ここからわかることは「僕」が出来事を「書き留め」ることに意識的であること、そして「老の寢覚の無聊を慰めるために」書いているのであり、他人からは読まれなことを前提としているということだ。つまり「僕」は公開される予定のない「メモワール」(下八)を執筆しているということになる。また傍線部「今しがた洗湯へ行つた」という表現からはこの手記を執筆している(今・ここ)といった具体的な場を想定することができる。実際に「僕は書くのを忘れてゐたが」(上六)といった表現からもわかるように「僕」は絶えず書記行為そのものを意識的に文中に書き記していることがわかる。

【A】の特徴的な語りは二四年間にわたる時間の経過と、ある

一時点の場面の転換が瞬時に切り替わる点にある。それを可能にするのは例えば以下のような場面の語り方だ。

初め三人が引越して来た時は、十二月の初旬ではあつたし、また僕等二人は通学の傍、仏蘭西語の夜学にも行つてゐたので、隣近処の様子には一向に気がつかずにゐたが、やがて寺の庭に梅が咲き、鶯が囀り、どこの家でも窓や縁側の障子をあけるやうになるのが早いとか、竹垣を境にした表隣の家には姉妹らしい女が二人住んでゐるのを知つた。(中略)

機会とは意外な方面から突然吾々を驚した。いきなり柵から牡丹餅が落ちて来たのだ。或日の夕方である。(上二)

ここでは【A】全体の二四年間の時間的持続のうち「十二月の初旬」から「鶯が囀」るようになる春先までの約四ヶ月間といつた一定の期間をごく自然な描写で提示しながら、その時間的な振幅の中からある特定の一点として傍線部「或日の夕方」が引き出されて語られていく構造になっている。そこで語られるのは「僕」と満枝との出会いであり、それがひいては妹である辰子との出会いへと結びついていくことを考えてみれば、物語の出発として重要な場面であるといえるだろう。このような時間的構造は以下の場面においても変わりはない。

娘の雪江が小学校もやがて高等科に進みかけた頃から、世の中の変わり出したことが、日一日と烈しくなつて行つた。満州と上海とに戦争が始り政府の要人が頻に暗殺される。不穩

の文字が町の角々に貼出される。然し東京の繁華は今日から回顧して見ると、其の頃が恐らく其絶頂に達してゐた時らしい。(中略)

それこれしてゐる中に時運はいよ／＼紛糾して遂に支那との戦争になつた。娘雪江はいつか小学校も卒業して女学校へ進んだ。年は十三。辰子は三十四。僕はとうに四十を超してゐた。僕は二十時分から耳の上あたりに若白髪の生えたことを知つてゐたくらいで。今は全体に七分通り真白になつたのを、かまはずに長く延ばして後方へ撫でつけ、(中略)

道端の草むらに野菊の花が咲き、櫛の葉の真紅に色づいた暮秋の一日、僕等三人、井の頭公園の腰掛に休んでゐた時である。(上五)

ここでもやはり雪江の学齢に注目すると小学校の高等科進級前後から卒業、そして女学校進学までの数年間ほどの時間の経過が示されていることがわかる。この限定された時間の経過の中に「満州と上海とに戦争が始り」とあるように一九三一年九月満州事変、一九三二年一月上海事変が勃発した様子が織り込まれ、さらには一九三七年七月日中戦争開戦といった時局の大枠が示され、その中から傍線部「暮秋の一日」という特定の一点が引き出されて物語が進行していく。また傍線部「今日から回顧してみると」というように語る(今・ここ)の水準と傍線部「今は全体に七分通り真白になつた」というように語られる(今・ここ)の水準を物語言説的に近接させつつ、しかし明瞭に区別しながら語っている点はこの作品の物語構造を明確に打ち出しているとい

えるだろう。

一九四四年の語る〈今・ここ〉の水準を一九三七年頃の語られる〈今・ここ〉の水準と対比し、七年間の時間的隔たりを明確に打ち出しながら、一九三〇年代の時代状況の大枠を語りつつ、その時間的振幅の中から物語内容を始動する特定の一時点「暮秋の一日」を指し示すこと。このことによって【A】は時代状況の大まかな流れと「僕」を取り巻く物語を同時に語っていくことを可能にしている。「問はずがたり」の【A】の語りはこのような時間的遠近法によって構成されている。

このような語りは【A】の末尾において「今年になつてから、雪江と松子とは時々言い争いをすることもあるやうになつた。」〈九〉というように語る〈今・ここ〉と語られる〈今・ここ〉の二つの水準が次第に接近していることが示され、その両者の距離が持ち得ない時点において「僕」の手記が一旦は終了する、つまり「問はずがたり」の「上の巻」が終了することになる。

三 括復法と単起法——「下の巻」の物語構造

「問はずがたり」の「下の巻」は先述したように【B】と【C】の二つの部分に分れる。まずは【B】の物語構造からみていくことにしよう。冒頭は以下のように書き出されている。

世の中にまだ紙があつた頃、毎年の暮、銀行からは預金者に、保険会社からは保険契約者に贈つた懐中日記などがあつたのを見つて出して退屈しのぎに亡妻と其娘のことを書綴つ

て見たところ、知らず／＼其一冊は余白の一枚さへないやうにしてしまつた。机の曳出しにはまだ何か古い手帳があるだらう。書漏した事と其後の事とをかき足して置かう。

（一九四四年十二月）〈下二〉

この箇所に記載された「（一九四四年十二月）」から【B】の物語内容はこの日付を起点として回想されていることがわかる。またここで初めて【A】もまた同じく一九四四年時点からの回想であつたことが判明する。ここでもやはり傍線部「書漏した事と其後の事とをかき足して置かう。」とあるように【A】と同様に「僕」はこの手記を書き記すという行為に対して意識的であることがわかる。

【B】で語られるのは「僕」と娘雪江と女中松子の三人の生活である。雪江と貴族院議員牧山子爵の長男義雄との縁談とその破談、さらに雪江と歌手である春山春夫との恋愛が語られ、そして「十一月廿九日の夜」〈下七〉以降、空襲で押し入れに避難しているときに「僕」と雪江が関係を持ってしまったことが語られる。時間的持続としては【A】の直後一九四四年九月頃から同年一二月頃までの約四ヶ月間を想定することができる。【B】で特徴的なのは【A】のように時代状況の大枠というよりも、日常的な情景の描写が中心となっている点である。例えば以下の場面がそれにあたる。

二三日、雨や風の後、昨日のように昼の中から灯のほしいほど暗く曇つた日が続きたりすると、来年草の芽の出るころ

まで、再び庭に出る日もないやうな気がするので、夜毎の露霜に土はしめつてゐるが、僕は散り積つた落葉を掃かうと箒を取りに裏庭へ行つた。見れば此の秋中、毎日飯をたいた竈が、今はいかにも用がないと言わぬばかり、見るかげもなく見捨てられて、其時分燃した枯枝の黒く焦げたのが取り散らされたまゝになつてゐる、これも何やら思出の跡のやうに哀れに見られる。

突然雪江がバケツを下げて勝手口から出て来た。(下六)

この場面における時間構成に注目してみよう。波線部「二三日、雨や風の後、昨日のように昼の中から灯のほしいほど暗く曇つた日が續いたりすると」というように直近の「二三日」の天気の様子を描写されることでこの場面における時間的振幅が示される。つづいてその時間的振幅に接続するように波線部「夜毎の露霜に土は湿つてゐるが」というように「夜毎」の地面の様子が描かれる。同様に波線部「見れば此の秋中、毎日飯をたいた竈が」というように毎日繰り返された行為が示された後、傍線部「今はいかにも用がないと言わぬばかり」というように「今」という特定の一時点が引き出されてくる。その時間的延長線上に傍線部「突然雪江がバケツを下げて勝手口から出て来た」の場面がつづき、

語られる〈今・ここ〉に密着した物語の現在時が描かれていくことになる。つまり括復的表现によって庭の情景を描写し、そこで提示された時間的振幅の中から物語が始動する一時点が単起的表現によって括り出されて語られるという時間構造になっているのだ。

【A】では時代状況の大枠を提示してから特定の一時点を示し出したのとは違い、【B】では日常の時間の流れの中から季節を感じさせる情景描写を中心に数日間の時間的持続が示され、その卑近な情景描写の中から特定の出来事が語られるという方法が採られているのである。【B】では回想する対象の時間的持続がたった四ヶ月ということもあり、【A】のように時代状況を説明する必要がなく、「僕」の周辺の物語だけを語ればよい。それゆえに極端に限定された日常から物語は語り出されているのだ。

このような語りの手法は【C】になつても変化はない。つづく【C】は「僕」が故郷の岡山県に移つてからの回想である。まずは【C】の冒頭部分から確認してみよう。

僕は今岡山県吉備郡□□町に残つてゐる祖先の家に余生を送つてゐる。五十年前に僕の生まれたところである。昭和二十年八月十五日の正午、僕はこの家の畠から秋茄子を摘みながら日軍降伏の事をラヂオによつて聞き知つたのだ。

僕の生涯は既に東京の画室を去る間際に於て、早く終局を告げてゐた。新しい生涯に入ることを、僕はもう望んでゐない。僕は昨日となつた昔の夢を思返して、曾て「問はずがたり」と題したメモワールをつくつて見たことがあつた。こゝにそが最終の一章を書き足して置かう。(下八)

傍線部「僕は今、岡山県吉備郡□□町に残つてゐる祖先の家に余生を送つてゐる。」から「余生」を郷里岡山ですこして「僕」の〈今・ここ〉が明示され、これまでの【A】【B】とは異なる

境遇から回想されていることがわかる。さらにこれまで書き付けられていた物語言説が「問はずがたり」と題されていたことも判明する。そして傍線部「こゝにそが最終の一章を書き足して置かう。」というように「こ」でもやはり「僕」がこの手記を書き記すということに意識的であることがわかる。【C】では一九四四年一月以降、主に雪江と松子が次第に不仲になっていったことが語られ、その雰囲気に嫌気がさした「僕」が郷里の岡山に行くこと、岡山が空襲に遭ったこと、終戦を挟んでそこで雪江のかつての恋人であった春山春夫に偶然再会したことなどが語られていく。最後は「九月は過ぎた。十月になるが否や、」(下十一)というように時の経過が示されると同時に岡山の牧歌的な風景が描かれて物語は終わりとなる。時間的持続としては【B】の直後、東京への空襲がひどくなる一九四五年三月頃から一九四五年一〇月頃までの約七、八ヶ月を想定することができる。ただこの時間的持続を回想している時点がいつであるのかは明示されることはないが、物語の末尾に位置する一九四五年一〇月以降のある時点を設定することが可能だ。

この【C】では時系列に直線的に物語が淡々と語られ、「僕」が郷里の岡山で生活している様子を描き出している。一九四五年五月、岡山に到着した日のことを「この日ほど岡山の空と山とを美しく懐かしく眺めわたしたことはおそらく一度もなかったであらう」(下九)とあるように「僕」は岡山の自然に感激している。このことからわかるように【C】で中心的に描かれるのは以下のような岡山の自然である。

初めこの地に来たころ、芒の穂よりも細かった稲の葉は忽繁茂して、今は目の及ぶかぎり青葉の波を打たせてゐる。あたりの木立や納屋の屋根にまで匍上る南瓜の葉蔭からは、大きな南瓜が早くも堅さうな其皮を褐色に変へはじめた。蘭草の生え茂る貯水池、田舟の繋いである暗渠の水の、堰から溢れおちて川となるあたりには、農家の子供が終日騒ぎながら泳いでゐる。茄子や豆畠の畦には野生の孔雀草が金ぼうげと共に金色の花をさかせ、熟した蕃茄は凌霄花と同じ緋色に輝き、垣の僅には蓮のやうな純白の花が日毎に数多く咲きかけて、満目の風物はいつとなく秋の近くなつて来たことを知らせはじめた。(九)

この引用における傍線部「初め」というのは「僕」が岡山にやって来た一九四五年五月頃のことを指す。同じ傍線部「今」は八月頃を指すと推定できる。なのでこの引用部分においては約四ヶ月間の時間的振幅を想定することができる。そのような時間的振幅は波線部「青葉の波を打たせてゐる」、波線部「終日騒ぎながら泳いでゐる」といったように文末詞が「る」で括られた日常的に反復される括復的表現で示され、それがこの文章全体の基調となっている。そのような時間的振幅の中から傍線部「褐色に変へはじめた」、傍線部「秋の近くなつて来たことを知らせはじめた」というように文末詞が「た」で括られた特定の一点点を指し示す単起的表現が引き出されてくる。このような語りの方法はこれまで確認してきたように【B】【C】に共通する特徴的な語りの方法だと言えるだろう。

しかしここにおける風景描写がいささか奇妙なのは「僕」の故郷である岡山の描写でありながら、記憶としての風景が一切記されていない点である。ある特定の地名や場所、それにまつわる「僕」の幼少時代の記憶などが風景とともに思い出されることはないのだ。以下の「問はずがたり」末尾の場面も同様のことが言えるだろう。

僕は農家に飼はれてゐる二三匹の山羊をつれて、毎日後の岩山に登り石に腰をかけて、何事をも思はず、惘然として唯日にあたることを楽しんでゐる。

松の深林、乾いた石逕、おとなしい臆病な山羊……。画家セザーヌと詩人ジャムが愛したプロワンス州ばかりが好い国とも限るまい穏やかな日のあたるところはどこへ行つても好い国だらう。〈下十二〉

ここでも波線部「僕」が「毎日」繰り返している日常的な行為が括復法的に記されているが、やはり先述の指摘同様、このような風景描写からは「僕」の思い出と言つた過去に密着した時間が語られることはない。つまりここでは「僕」が故郷で過ごしたという時間が決定的に欠落しており、**【B】****【C】**に共通する特徴的な括復法的な語りの手法によって極めて叙情的で写生的な風景描写が前景化されているのだ。

四 〈風景〉の語り方——空洞化する時間

それでは「問はずがたり」の末尾で展開されるこのような時間が欠落した風景描写からどのようなことがわかるだろうか。「問はずがたり」を読んでもまずはじめに気がつくのは後半に進むに従つて物語内容の中心となる展開が明らかに変質しているということだ。**【A】****【B】**においては「僕」を中心とする家族の物語、もしくはそれに加えて娘雪江、女中の松子との物語が展開されていたのに対して、**【C】**では岡山に隠棲した「僕」宛に雪江が送つてきた手紙の内容、雪江の恋人だった春山春夫と「僕」が再会したこと以外は岡山の風景描写が主となっている。特に先述したように**【A】**において特徴的だった時代状況の大枠を語りつつ、その時間的振幅の中から特定の一時点を引き出して物語内容を展開させていくといった方法は影を潜め、**【C】**では先述した末尾の引用からもわかるように特定の時間軸が示されることなく眼前の風景が極めて叙情的に語られている。

このように同一の作品でありながら**【A】**から**【C】**に進むにつれて物語内容の展開や時間的表現の方法に大きな差異が生じてしまうのはそれぞれの部分の成立過程によるところが大きい。今一度確認してみるならば**【A】**は戦中の一九四四年一〇月下旬、**【C】**は戦後の一九四五年一一月にそれぞれ成立している。この成立時期ゆえに物語内容に流れる時間として**【A】**は一九二〇～一九四四年までの二四年間を時間的持続として描くことが可能となる。そして**【A】**において物語内容の現在時が一九四四年まで

進行してしまつと、その続きを描いた【B】の後に位置する【C】は成立時期を考えても必然的に戦後を中心とする七、八ヶ月間の時間的持続しか持ち得ない。この【A】と【C】の極端な時間的持続の違いゆえに物語内容の中心となる展開も、時間を操作する語り方も自ずと変化がもたらされるのだ。

そして何より【C】の描写に大きな影響を与えているのは実作者荷風の岡山における疎開体験である。荷風が岡山に疎開したのは一九四五年六月一二日から八月三〇日のことで、さらに「間は「間はずがたり」で舞台となる総社で過ごしたのは八月二七日から三〇日までの四日間である。ここで注目したいのは荷風が小説というジャンルにおいて自身の疎開体験を回想するときどのような描き方をしたのかということだ。例えば同じく戦後になってから執筆された随筆「草紅葉」(「中央公論」一九四六・一二)における以下の描写を検討してみよう。

戦後に逢ふ二度目の秋も忽ち末近くなつて来た。去年の秋はこれを岡山の西郊に迎へ、その尽るのを熱海に送つた。今年下総葛飾の田園にわたくしは日毎に烈しくなる風の響をき、つゝ、光陰の早く去るのに驚いてゐる。岡山にゐたのは、其時には長いやうに思はれてゐたが、実は百日に満たなかつた。熱海の小春日和は明るい昼の夢のやうであつた。(略)

八幡の町の梨畠に梨は取り尽され、葡萄棚からは明るく日がさすやうになつた。玉蜀黍の茎は倒れて見通す稲田の眺望は軟かに黄ばんで来た。いつの日にか、わたくしは再び妙林寺の松山に鳶の鳴声をき、得るのであらう。今ごろ備中総社

の町の人達は裏山の茸狩に、秋晴の日の短きを歎いてゐるにちがひない。三門の町を流れる溝川の水も物洗ふには、もう冷たくなり過ぎてゐるであらう。

待つ心は日を重ね月を経るに従つて、郷愁に等しき哀愁を醸す。郷愁ほど情緒の美しきものはない。長くわたくしが巴里の空を忘れ得ぬのもこの情緒のなすところであらう。

荷風は岡山での疎開生活を終え、一九四五年八月三一日に上京。九月一日より熱海で生活し、翌一九四六年一月一六日より市川に移る。この随筆は市川に住んでいるときに終戦前後のことを回想した内容になっている。岡山での疎開生活から一年三ヶ月を経て発表された随筆である。荷風の回想は至つて冷静で自身が岡山に疎開していた期間を「其時には長いやうに思はれてゐたが、実は百日に満たなかつた」と正確に記している。また現在住んでいる「八幡の町」の風景を「備中総社の町」「三門の町」というやうに岡山疎開時代に住んだ場所の風景と重ね合わせそれらを「郷愁に等しき哀愁」「郷愁ほど情緒の美しきものはない」とし、さらに外遊時代の記憶と接続させながら「巴里の空」を連想している。ここでは「美しさ」を伴つた「郷愁」によつて岡山の風景が語られている。

しかしその描写の詳細を検証してみると傍線部「今ごろ備中総社の町の人達は」にちがひない。「傍線部」「三門の町を流れる溝川の水も」であらう。」というようにある一定の時間的距離感が確保された上で、空想の中で語られていることがわかる。つまり岡山疎開時代の風景はすべて「美しさ」を伴つた「郷愁」に回収

されてしまい、そこに具体的な回想内容が記述されることはないのだ¹⁹⁾。それは今住んでいる市川八幡の風景に岡山疎開時代の風景が織り込まれ、それゆえに重層的な時間軸の中で八幡の風景が描かれているのとは対照的な描写だ。

このような回想の方法を「問はずがたり」といった小説のジャンルで考えてみると、「問はずがたり」の末尾における場面は確かに随筆「草紅葉」と同様に具体的な回想内容が記されていない風景描写である。しかしここで重要なのは「問はずがたり」が「僕」という一人称による回想体小説であるという点である。つまり小説としては時間軸が過去へと差し出され、その語られる回想内容が語る〈今・ここ〉に向かって接近することで初めて成立する物語構造であるにもかかわらず、物語の展開が進み【C】になるに及んで語り手（書き手）である「僕」はその手法を放棄してしまうのだ。そこで描かれるのは時間が空洞化した写生的ともいえる風景描写である。

結 回想される〈風景〉——永井荷風の再出発

自身の岡山での疎開体験を記憶の時間を捨象した風景として回想すること。戦後、荷風は「踊子」（展望）一九四六・一）、「勲章」（新生）一九四六・一）、「浮沈」（前出）、『来訪者』（筑摩書房 一九四六・九）などいづれも戦中に書き溜めた作品を一気に発表する。このことを中村真一郎が「戦後の日本文壇の最も輝かしい事件は、偉大なる師匠、永井荷風の華やかな come-back である²⁰⁾」と評するように、荷風の復活は戦後文壇を代表する象徴的

な「事件」であったことは改めて確認するまでもない事実である。しかし、それと同時に発表された「問はずがたり」こそ戦中戦後をまたぎつつ、岡山での疎開体験を経たのちの一九四五年一月に熱海で擱筆された荷風の戦後における創作活動の紛れもない第一歩であった。それが岡山での疎開体験を回想した一つの〈風景〉であったことは注目されてもいいだろう。荷風の戦後はまさにこの地点から始まるのだ。

注

- (1) 初出の他に単行本として「問はずがたり」（扶桑書房 一九四六・七）、荷風自身の校訂が入った生前の全集『荷風全集第十七巻』所収（中央公論社 一九五一・四）がある。本論は中央公論社版全集を底本とする『荷風全集第十九巻』（岩波書店 一九九四・一一）に拠った。

- (2) 日夏耿之介『荷風文学』（三笠書房 一九五〇・三）所収。

- (3) 佐藤春夫『荷風雑感』（国立書院 一九四七・一二）所収。

- (4) 赤瀬雅子『永井荷風とフランス文学』（荒竹出版 一九七六・四）所収。

- (5) 宮城達郎「『問はずがたり』論ノート」（『明治大学教養論集』八四号 一九七四・一）、のち同『耽美派研究論考 永井荷風を中心として』所収（桜楓社 一九七六・六）もまた「問はずがたり」冒頭に引用されるミユッセの詩を手がかりに、その影響について言及している。

- (6) 笹淵友一「問はずがたり」（同『永井荷風——「墮落」の美学者——』所収（明治書院 一九七六・四）

- (7) 坂上博一「『問はずがたり』論」（吉田精一博士古希記念論集刊行会編『日本の近代文学——作家と作品』所収 角川書店

一九七八・一一)もまた同じく「従来の荷風文学のすべてが、この「問はずがたり」に流れこんでいる」とし、荷風文学全体を捉えながら作品の位置づけを行っている。

- (8) 森安理文『永井荷風 ひかげの文学』所収(国書刊行会 一九八一・一二)三〇六頁。

- (9) 菅野昭正『永井荷風再考』(NHK出版 二〇一一・一) 七六―一七七頁。

- (10) 若菜薫『荷風散人 芸術としての孤独』所収(鳥影社 二〇一四・一二)四〇三頁。

- (11) この脱稿日は初出、単行本では記されておらず中央公論社版の『荷風全集第十七巻』(前出)に収録される際に加筆された。

- (12) 「問はずがたり」の成立過程については竹盛天雄「後記」『荷風全集第十九巻』所収 三五八―三七一頁 岩波書店 一九九四・一一)に詳しい。

- (13) 竹盛天雄「後記」(前出)にはこの時執筆された箇所について残された原稿の検証から「おそらく、現在の下巻の「七」以後をさす」(三六〇頁)と判断しているが、本論では荷風が「下の巻」(七)を改稿し、新たに「八」―「一一」を執筆したと考えたい。

- (14) 竹盛天雄「後記」(前出)に詳細に記されているように「問はずがたり」はこの他にも複数の原稿が残されており、どのように生成していったのかを考える草稿レベルの研究、また荷風の作品で唯一GHQの検閲を受けたので、作品の生成論としての検証が不可欠と考えるが、これらの点については改めて論及したい。

- (15) 実際には「僕」は辰子が一八歳の時に出会い、辰子が四〇歳で死んでから一年後にこの回想は始まっているので、正確な時間的持続は二三年である。

- (16) 一九三七年当時、雪江が一三歳であるならば、満州事変が勃発した一九三一年では彼女は七歳ということになり、本文中「小学校もやがて高等科に進みかけた頃」という事実と時間的に矛盾していることになる。

- (17) 正確を期すればここで「僕」が指し示す「問はずがたり」と実作者永井荷風が執筆した「問はずがたり」が一致するという保証はどこにもないが、本論では便宜上同一の作品として扱う。
- (18) 荷風の岡山における疎開体験については拙論「疎開者としての永井荷風——岡山時代を考える」(志學館大学人間関係学部研究紀要)第三四巻一号 二〇一三・一)、同「岡山疎開時代の永井荷風——菅原明朗『荷風罹災日乗註考』を読む——」(立教大学日本文学)第一一〇号 二〇一三・七) 参照。

- (19) このことは荷風が岡山に疎開していたとき、自然の風景を満喫しながらも、最終的には「到底余の胸底に蟠る暗愁を慰むべきに非らず」(「断腸亭日乗」一九四四年七月二三日)というように低いトーンへ帰着してしまうことと関係してくるだろう。詳細については(18) 参照。

- (20) 中村真一郎「七十歳の論理——荷風と我等——」(加藤周一・中村真一郎・福永武彦『1946・文学的考察』所収 真善美社 一九四七・五)

【付記】引用文における傍線、傍点などは引用者による。なお本稿は平成二六年度志學館大学特別研究費による成果である。

(しまだなおや 志學館大学准教授)